

## 《素問》版本概要<sup>1</sup>

眞柳 誠（茨城大學大学院人文科學研究科）

**提要：**《素問》の版本は多数あり、字句の相違が著しいため、条文の訓詁や理解に困難をもたらしてきた。版本相互の関係が現在まで未解明だったからである。そこで成書以降の傳承史を整理した上で、版本となった北宋以後の變化を現存諸本の字句對校、及び史書・目錄の記載から検討した。この結果、已に亡佚した宋版を含め古本 13 種の存在が確認され、相互関係を「《素問》本篇の古本系統圖」に整理できた。當結果で以下の諸點が明白となった。①《素問》の字句は、基本的に北宋 1069 年の熙寧本以前に遡り得ない。②熙寧本（亡佚）の舊態を唯一保存するのは 1550 年跋刊の明・顧從徳本だった。顧本を研究の第一底本とすべきことは今後も不變である。③元 1283 年の讀書堂本は北宋 1078-85 年の元豊本（亡佚）系統だった。日本の室町古鈔本は北宋 1121 年の宣和本（亡佚）系統だった。④従って北宋版 3 種の舊を保有する顧從徳本・讀書堂本・古鈔本の經注文を對校するなら、熙寧本ないし熙寧の底本に一層肉薄することも可能だろう。⑤熙寧本以前の様相を理解するには《太素》や《甲乙經》等との校異が有用だが、限界もある。⑥上記以外の現存諸版は均しく派生本だった。従って版本研究には有用だが、字句の訓詁や条文の研究理解には不適當と判断された。

## 1 序論

馬王堆等の出土醫書や《史記》扁鵲・倉公傳の記述に據ると、先秦時代から蓄積されてきた醫學知識と記録が複雑な經緯を辿り、諸文獻に集積されていたに相違ない。その一つの集大成が《漢書》藝文志・方技に著録の「黃帝內經十八卷・外經三十七卷」だろう。《漢志》は前 6 年頃に成書の《七略》に概ね依據し、方技書は西漢・侍醫の李柱國が整理・分類し、更に書名を與えた<sup>2</sup>。《漢志》方技に著録された「扁鵲內經九卷・外經十二卷、白氏內經三十八卷・外經三十六卷、旁篇二十五卷」の一部系統は魏晉まで傳承されたが、南北朝でほぼ亡佚したらしい。當情況は最近の出土文獻や、《葛氏方》《脈經》と《范汪方》《小品方》が引用する文獻の相違でよく解る。

則ち西漢末まで傳承された黃帝系の基礎文獻群から取舍選択と整理を経て、《素問》の書名と原内容が東漢の 1 世紀初頭に定められた。故に本書の多くは傳説上の人物、黃帝と

1 本稿は以下の拙報の概要である。「《素問》版本研究（その 1）」《季刊內經》188 號 4-57 頁、2012。「同上（その 2）」同上 189 號 4-42 頁、2012。「同上（その 3）」同上 190 號 4-44 頁、2013。「同上（その 4）」同上 191 號 4-40 頁、2013。

2 柳長華「《漢書・藝文志》醫經著録研究」《山東中醫藥大學學報》23 卷 2 期 137-141 頁、1999。

臣下の岐伯・雷公・鬼臾區との問答に假託する形式で編述されている。問答形式で記述する中国・印度・ギリシャの古代文獻は多い。當然、本書や《九卷》（後の《鍼經》《靈樞》）は一人一代の作でなく、内容や語彙には秦代を遡る者、漢代の者、或いは漢以降と推定される者が現傳本に混在している。同一篇内ですら、異なる發展段階の論説が併記される場合もある<sup>3</sup>。

《素問》の書名が初出するのは 3 世紀前期の《傷寒論》張仲景序の記述「素問・九卷・八十一難」で、3 世紀後期の《脈經》卷 3 も經文の出典に「右素問・鍼經・張仲景」と注記する。兩記録の「素問・九卷（鍼經）」には「黃帝」も「內經」もなく、《漢志》「黃帝內經十八卷」との關係を當時は意識していない。この點は注意が必要である。又、仲景が兩書を「素問・九卷」と記録したので、當時の《素問》は 9 卷ではない。全元起本からすると恐らく 8 卷だっただろう。以後、本書は中國および周縁國の傳統醫學における最重要古典の一つとされ、數多の變遷を経て現在まで傳承された。

特に北宋時代に校定・刊行されて以降、多くの醫家が本書の醫論を實踐に應用し、發展させた。これ等が現代に至るまで中國系傳統醫學の根幹を形成している。注解書や研究書も汗牛充棟で、本書が後世に與えた影響は巨大だった。しかし幾重もの校定や出版で字句には複雑な變化が発生している。

## 2 宋代までの傳承

東晉の無名氏は《甲乙經》を 4 世紀後半に編纂<sup>4</sup>した。その序文で當時の《鍼經》九卷・《素問》九卷が《漢書》藝文志の「黃帝內經十八卷」との説を初めて提起し、この説が後世に歡迎されてしまう。齊梁間の 500 年前後には全元起が《素問》に訓解や篇順の整理を加え、《黃帝素問》8 卷を編纂した<sup>5</sup>。當段階で初めて書名に「黃帝」を冠し、權威付けられている。唐の永徽醫疾令（651）は當時の韓國・日本でも同様に規定<sup>6</sup>され、各國令で鍼

3 劉伯堅（丸山敏秋譯）《黃帝內經概論》17-33・106-118 頁、千葉・東洋學術出版社、1985。

4 《甲乙經》は皇甫謐（215-283）が 3 世紀後半に編纂したと通説されてきた。ところが本書は諸點で 3 世紀後期の《脈經》を意識・参照して編纂している。又、卷 7 以後で孔穴主治文を「病症+穴名+主之」の形式で記述し、仲景醫書の「病症+方名+主之」を轉用した。當形式は仲景書の影響もあって葛洪以降の東晉から始まり、范汪（約 308-372）の 4 世紀後半で徐々に廣まっていたことが《醫心方》所引の《范汪方》佚文から解る。つまり《甲乙經》は東晉 4 世紀後半頃の無名氏が編纂したに相違ない。《甲乙經》の引用文が《小品方》（454-473）に初出（《醫心方》卷 2）する史實も、之を傍證する。

5 ①藤山和子「全元起注《黃帝素問》の成立について」《東方學》70 輯 18-32 頁、1985。②松木きか「《黃帝內經素問》「全元起注本」の復元と「王冰注本」の構成」《集刊東洋學》66 號 60-82 頁、1991。

③段逸山《《素問》全元起本研究與輯復》全 276 頁、上海科學技術出版社、2001。

6 ①丸山裕美子「北宋醫疾令による唐日醫疾令の復原試案」《愛知縣立大學日本文化學部論集》第 1



#### 無名氏本の系統

**B** 新校正の改稿本と熙寧本を再校定して注下に音釋を付加した②北宋元豊本、元豊本を翻刻した⑦南宋中後期本、南宋中後期本を覆刻して亡篇を付録した⑨元讀書堂本、南宋中後期本と亡篇を翻刻して一部字句を改めた⑩元古林書堂本の系統

**C** 熙寧本・元豊本に新校正の初稿本と定稿本も併用し、注下に音釋を付加した③北宋宣和 3 年本、宣和本の⑥南宋末詳年翻刻本に基づく日本の室町古鈔本

**D** 元豊本・宣和本に紹興本系を併用して卷末に音釋も付加し、亡篇を付録した⑧金末蒙古初刊の金版

## 4 北宋版

### ①熙寧本

北宋政府は《素問》を天聖・景祐・熙寧・政和の 4 次に互り校定し、天聖・熙寧・政和の校定本は刊行された<sup>9</sup>。天聖醫疾令（1029）で鍼學の必習書とされた《素問》<sup>10</sup>は天聖校刊本だっただろう。中でも校正醫書局の高保衡・孫奇・林億が擔當し、更に孫兆も參與した校定が最も大規模で、林億等序が「臣等承乏典校、伏念旬歲」と記す前後 10 年に渉る新校正で熙寧 2 年（1069）校刊<sup>11</sup>の熙寧本となった。彼等は初稿本・改稿本・定稿本と校定を重ね、彫板後も版木から不正字を削除し、脱字を補刻していた。是は後述の顧從徳本にある空格部分を、室町古鈔本と比較すると判明する。今日に傳わる《素問》の全版本はこの熙寧本を祖とする。南宋の《直齋書錄解題》<sup>12</sup>や《通志》藝文略<sup>13</sup>の著録等からすると、熙寧本は正式書名「補注黃帝內經素問」・内題「黃帝內經素問」の 24 卷 79 篇だった。醫書の卷末に音釋（字音・字義・聲調）を付すのは北宋末以降の風潮につき、熙寧本は注下にも卷末にも音釋が無かったと推定できる。現存各本からすると王冰序は「黃帝內經素問序」、林億等序は「校正黃帝內經素問序」と題したらしい。當段階或いは天聖・景祐の校定段階で書名に「內經」が付加され、「黃帝內經素問」となった。これが《素問》こそ西漢の「黃帝內經」の一部との傳説を裏付け、現在まで通説とされる一因となった。しかし

9 王應麟《玉海》卷 63・1196 頁、江蘇古籍出版社・上海書店影印本、1987。

10 天一閣・中國社會科學院歷史研究所天聖令整理課題組《天一閣藏明鈔本天聖令校證》551-580 頁、北京・中華書局、2006。

11 松木きか「北宋の醫書校訂について」《日本中國學會報》48 集 164-181 頁、1996。

12 陳振孫《直齋書錄解題》、許逸民ら編《中國歷代書目叢刊》第 1 輯下 1360 頁、北京・現代出版社、1987。

13 岡西爲人《宋以前醫籍考》5 頁、台北・古亭書屋、1969。

熙寧本も現存しない。

## ②元豊本

北宋の元豊間（1078-85）には、全篇に互り注下に音釋が付加された私家版の孫氏校刊本もあった。元豊本は後述する元・古林書堂本の總目冒頭にある木記の記述、及び古林本と元・讀書堂本の書式・字句の特徴から解る。元豊本は孫兆個人が再校定し、出版には《宋史》で姦臣とされた宰相の呂惠卿が關與した可能性もある。孫兆の弟・孫宰は呂惠卿の部下だった時期があり、惠卿は編校集賢院書籍・秘書省校書郎・判國子監を任じ<sup>14</sup>、出版にも精通していたからである。讀書本・古林本からすると、元豊本の正式書名は「補註釋文黃帝內經素問」、内題は「新刊黃帝內經素問」だっただろう。林億等序は「校正黃帝內經素問序」と題して末尾に高保衡・孫奇・林億の列銜を記し、王冰序は「黃帝內經素問序」と題して末尾に孫兆の銜名を記したらしい。元豊本も現存しないが、舊態は⑦南宋中後期坊刻本の再版本を介して讀書本に保存される。

## ③宣和本と室町古鈔本

徽宗帝の時代に醫官の育成制度が變更され、崇寧 2 年（1103）に首都・開封の醫學校における教科書が定められ、その筆頭が《素問》だった。政和 5 年（1115）には各地の醫學校にもほぼ同様の規定が實施された<sup>15</sup>。こうした醫官育成の擴充に對應するのが、北宋最後の《素問》校定だったらしい。校定は徽宗の關心もあって宰相の蔡京と長子の蔡攸が主唱し、蔡京を最高責任者、蔡京第二子の蔡儵を實質監督に政和 8 年から開始され、校正人員には儒官・醫官・道士が選任されている<sup>16</sup>。校正內經・同詳定官の蔡儵は宣和 3 年（1121）12 月 25 日に名譽學位の「進士出身」を賜った<sup>17</sup>ので、校定は同年までに完了し、その前後に刊行されただろう。これが宣和本である。

ところで日本の宮内廳書陵部に室町時代 14 世紀中葉 - 15 世紀中葉筆寫の古鈔本《素問》が所藏され、その卷 18 末尾に「假承務郎權醫學錄臣趙叔度校正 / 軍器庫副使兼翰林醫官臣盧德誠校正」の列銜がある。慕容彦逢（1067-1117）が徽宗に侍した時の詔勅等を編集した《摘文堂集》に、盧德誠等を醫功により進官一等と記録<sup>18</sup>されるので、室町古鈔本の

14 脱脱等《宋史》289・308-309・13705-13708 頁、北京・中華書局、1977。

15 徐松輯《宋會要輯稿》崇儒 3 之 12・同 3 之 16-19、北京・中華書局影印本 2199・2201-03 頁、1957。

16 徐松輯《宋會要輯稿》崇儒 4 之 10・11、北京・中華書局影印本 2221 頁、1957。

17 徐松輯《宋會要輯稿》選舉 9 之 16、北京・中華書局影印本 4390 頁、1957。

18 四庫全書本（永樂大典本）《摘文堂集》卷 7 に、「西綾錦副使兼翰林醫官副使蓋演醫官副使盧德誠・翰林醫官賜緋丁銳・翰林醫學李師老、可各轉一官制。 / 勅具官某等。爾等祗事衛府醫診有勞、宜錫恩章、昭示嘉獎、進官一等。其克欽承可」とある。

底本は宣和本の系統だったと確證できる。室町古鈔本を検討した結果、宣和本 24 卷 79 篇は熙寧本と元豊本を底本とし、新校正の初稿本と定稿本も参照していた。經注文の大多數は熙寧本・元豊本双方の特徴を繼承するが、新たな字句の校正や補足もされた。音釋を注下に配する點は元豊本に従い、多くの音釋を轉載したが、一部には増損がある。正式書名は「補註釋文黃帝內經素問」で、卷頭・卷末題は「黃帝內經素問」だったらしい。

北宋首都の開封に金軍が侵攻した靖康の變で蔡京一族が姦臣として斷罪され、宣和本は版木が金軍に掠奪された理由もあり、今日まで歴史の闇に埋没していた。宣和本も現存しないが、南宋の坊刻再版で卷頭・卷末に「重雕補註釋文黃帝內經素問」と題され、卷 18 末のみ舊題と擔當校定者の列銜が偶然遺された。この⑥南宋末詳年刻本を筆寫したのが室町古鈔本である。

## 5 南宋版

### ④紹興本

別稿で論じるが、南宋の國子監は史崧が獻上した北宋・元祐 8 年（1093）刊の《鍼經》9 卷本系を底本とし、書名・卷數を《靈樞》24 卷に改變して紹興 25 年（1155）に序刊した。この時、國子監は紹興本《素問》も合刻し、兩書を初めて「黃帝內經」と統稱している。王冰の言に従い《鍼經》を《靈樞》に改名し、《素問》24 卷と合致させるため 9 卷を 24 卷に分卷したのだった。紹興本《素問》を精緻に影刻したのが後述の明・顧從徳本である。顧本を検討したところ、紹興本は熙寧本の經注文を覆刻していた。但し《靈樞》と合刻したので、序題と卷頭・卷末書名では 2 書の合編を意味する「重廣」を付加し、「重廣補註黃帝內經素問」に改稱・統一している。

上述の改變を主導したのは、侍醫として南宋初代皇帝の高宗を籠絡し、《宋史》が佞幸に列した王繼先（1098-1181）<sup>19</sup>と門下の醫官だった。彼等は元豊本と宣和本の音釋を引用して熙寧本の卷末に付記し、新作音釋も杜撰に追加したため、各種多量の問題が発生している。彼等の付加らしい總目「黃帝內經目錄」にも問題があった。紹興本には王繼先等の序や列銜などもあっただろうが、王繼先が 1161 年に彈劾・追放<sup>20</sup>されたため、その後の南宋では紹興本を重印や再版の際に繼先等の序跋・列銜を削除した。これ等の背景もあり、紹興本での《素・靈》合刻や音釋付加等の事情は今日まで一切未知だった。紹興本《素問》

19 脱脱等《宋史》13686-13688 頁、北京・中華書局、1977。

20 方春陽《中國歷代名醫碑傳集》165-171 頁、北京・人民衛生出版社、2009。

も現存しないが、舊態は顧從徳本に保持されている。南宋では國子監の重刊らしい⑤紹定(1228-33)本、古鈔本の底本で宣和本に基づく⑥南宋末詳年坊刻本、元豊本を稍丁寧に翻刻した⑦南宋中後期坊刻本もあったが、皆亡佚しただろう。

## 6 ⑧金版

刻工名から金末蒙古初 13 世紀中葉の平水刊本と判断できる金版が、中國國家圖書館に唯一現存<sup>21</sup>する。民國時代に出現<sup>22</sup>し、卷 3-5・11-14 の 2 冊及び卷 15-18・20 と亡篇の 3 冊が補配されて現在に傳わる。卷末にある大量の音釋は一部が明らかに紹興本系からの轉用で、經注文も紹興本系を主底本とし、一部に元豊本系と宣和本系も使用していた。付録の《亡篇》2 篇は北宋初期<sup>23</sup>の鍼治療と醫藥を嗜む道士が、《素問》特に運氣七篇を参照して捏造したらしい。已に熙寧本の時代から流布していた<sup>24</sup>が、宋版《素問入式運氣論奥》に付録の《素問遺篇》がある<sup>25</sup>ので、金版は之を轉録した可能性もあった。金版の底本とされた紹興本系・元豊本系・宣和本系は、その舊を比較的正確に伝える各本が現存する。従って各本を上回る價值を金版に認めることはできない。

## 7 元版

### ⑨讀書堂本

元の讀書堂本 24 卷・付《亡篇》2 篇は民國時代に出現<sup>26</sup>した。その一點が現在の中國國家圖書館に所藏され、「海塩張元濟 / 庚申歲經收」の藏印記があるので、張元濟が民國庚申年(1920)に入手している。彼の《涵芬樓燼餘書錄》(1951)にも著録<sup>27</sup>される。これとは別本で、「□□歲癸未中和節、書于讀書堂」の序文もある讀書本が民國時代<sup>28</sup>に著録されたが、現所在は不明。當序文の「歲癸未」より、讀書本は前至元 20 年(1283)の序

21 眞柳誠「現存最古の《素問》、北京圖書館藏の金版」《漢方の臨床》46 卷 9 號 1536-1538 頁、1999。

22 ①王文進《文祿堂訪書記》167 頁、上海古籍出版社、2007。②丁福保・周雲青《四部總錄醫藥編》320 頁、上海・商務印書館、1955。

23 王玉川・梁峻「《素問遺篇》成書年代考辨」《北京中醫學院學報》1993 年第 2 期 10-13 頁。

24 《素問》卷 21 冒頭の篇目に「刺法論篇第七十二亡、本病論篇第七十三亡」と明記される。又、篇目下の新校正注にも、「詳此二篇、亡在王冰之前。按病能論篇末王冰注云、世本既缺第七二篇、謂此二篇也。而今世有素問亡篇及昭明隱旨論、以謂此三篇、仍託名王冰爲注、辭理鄙陋、無足取者」と記される。

25 岡西爲人《宋以前醫籍考》61 頁、台北・古亭書屋、1969。

26 孫殿起《販書偶記》227 頁、上海古籍出版社、1982。

27 李茂如等《歷代史志書目著録醫籍匯考》1241 頁、北京・人民衛生出版社、1994。

28 丁福保・周雲青《四部總錄醫藥編》320 頁、上海・商務印書館、1955。

刊と推定できる。但し國家圖書館本の《亡篇》は字様から見て、明・嘉靖年間前後の修補だった。讀書本は宋諱の缺筆がある等の特徴から、元豊本に基づく南宋中後期翻刻本の覆刻と判断できる。偽撰の《亡篇》が付録されるものの、《素問》本篇の字句は問題が比較的少なく、元豊本の舊態を濃厚に遺存していた。今後は《素問》研究の重要底本とされねばならない。

#### ⑩古林書堂本

江西廬陵の古林書堂が 24 卷を 12 卷に改編し、元の後至元 5 年（1339）出版した古林本は多数現存する。「元豊孫校正家藏善本」と云う南宋中後期本に基づく翻刻のため、讀書本と兄弟関係にある。しかし一部字句には紹興本系と、宣和本系の南宋末詳年翻刻本に據る「校正」が確認された。又、卷數や諸書式まで改めたのは讀書本との近似を避ける目的があったらしい。一方、古林本《運氣論奧》に付録の《遺篇》（舊名は亡篇）を他本と比較すると、古林本・讀書本は同系、金版は別系だった。古林本の本篇も元豊本の舊態を伝えるが、脱文・節略や略字・俗字の多用、妥當性の低い字句が讀書本より多い。

古林本の影響は大きく、明代だけでも《道藏》本（1436-69）・熊宗立本（1474）・田經本（嘉靖初期）・詹林所本（嘉靖前期）・種徳堂本（1553）・趙府居敬堂本（嘉靖年間）・吳悌本（1532 頃）・吳勉學本（1601）として翻刻された。又、三木は朝鮮本《新刊補註釋問黃帝內經素問》12 卷に活字版と整版の 6 種を報告<sup>29</sup>し、その書名・卷數からも古林本系と指摘する。刊年の記載があるのは第 5 に挙げる萬曆 43 年（1615）の内醫院刊訓練都監活字本で、《素問入式運氣論奧》3 卷を付印していた。乙亥活字本《素問》にも《運氣論奧》が付印され、いずれも古林本系である。

## 8 明版

#### ⑪顧從徳本

《素問》の明版は各本が現存するが、筆頭は顧從徳本である。1538 年に嘉靖帝の侍醫・太醫院御醫となった上海の名家・顧定芳（1489-1554）<sup>30</sup>の二男が從徳（1518-87）で、朝廷で鴻臚寺序班の官に登った<sup>31</sup>。顧氏父子が紹興本を精緻に影刻したのが 1550 年跋刊の顧

29 三木榮《朝鮮醫書誌》203-207 頁、大阪・學術圖書刊行會、1973。

30 ①高毓秋「滬地出土明墓及濕屍考古兩則」《醫古文知識》1995 年 1 號 33-35 頁。②方春陽《中國歷代名醫碑傳集》543-545 頁、北京・人民衛生出版社、2009。

31 王世貞《弇州四部續稿》卷 107（《四庫全書》集部別集類・明洪武至崇禎）に、「孺人……得壽六十、有六子婦事見前。女三適鴻臚寺序班顧從徳」とある。



本である。その初刻本は從德跋 2 葉を付すが、定芳校記の刻入がないため、跋文を抜き去ると宋版を偽るのも可能だった。《經籍訪古志》著録の「明代摸刻宋本」の實態である。こうした偽装を防ぐ爲もあり、恐らく定芳没の 1554 年以降に校記を入木で書末に刻入したのが顧氏補刻本だった。それでも現存補刻本の大多数は巧妙に校記まで切除され、宋版に偽装されている。

曾て仿宋版とされた<sup>⑫</sup>明・無名氏による《靈樞》との合刻本も、嘉靖後期の業者が幾重にも偽装した顧本の海賊版だった。無名氏本の影響は四庫全書本《素問》にも認められる。眞正の顧本には明・清の翻刻本および日本・安政 4 年（1857）の覆刻本もあるが、近現代の影印本には及ばない。しかし影印本でも長短があるため、利用には注意を要する。その他の明清版・朝鮮版・和刻版は均しく上記各本からの派生につき割愛したい。

## 9 總括

《素問》は以上の如く、約二千年の時空を経る過程で多くの訛字や増損が生じた。一方でそれ等の校定が重ねられ、「妥當性の低い字句」を「高い字句」に改字してきた。校定に據って唐代はおろか漢代、更に上古の字句に「復古させる」という信念、「復古し得る」という確信があった故だろう。しかし一度變化した字句は、客觀的に校勘し、論理的に訓詁しても、妥當性でしか當否を推定できない。《素問》《靈樞》の經文を《太素》と比較すると、推定を超越した字句の變化に愕然とする時がある。現在の《素問》《靈樞》研究は、漸く當段階に至った。

《素問》に限るなら結局、熙寧本以前には基本的に遡り得ない。従って熙寧本の舊態を唯一保存する顧從德本を、第一の底本とすべきことは今後も不變である。元豊本系の讀書本及び宣和本系の古鈔本と經注文を對校することで、熙寧本ないし熙寧の底本に一層肉薄することも可能だろう。それ以前の様相を理解するには《太素》や《甲乙經》等との校異が有用だが、無論限界もある。上記以外の現存諸本は均しく派生本だった。これ等各本は版本研究に有用だが、字句の訓詁や條文の研究理解には不適當と判斷された。

《素問》は魅力的、且つ示唆に富む經文を保有した中國最古の醫學古典である。しかし「校定」され續けた歴史を看るなら、その解釋や利用には如上の問題があった。今後の更なる研究でも一層の注意が必要、と痛感せざるを得ない。